戦姫絶唱シンフォギアXL　～咎人と業火の魔剣～

ご近所の林さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦姫と出会い、魔剣と出会う。

突如として現れた魔剣『レヴァンティン』。

世界を焼き尽くす魔剣を手にしたのは１人の少年だった。

歌姫達は戦場を駆け、やがて少年は真実を知る。

手にしたそれは、災厄か、希望か。

はじめまして、ご近所の林です。
初投稿なので勢いでやっていきます。
思いつきを数字で語れるものかよっ!!
よろしくお願いします。
ちなみにこちらオリジナルキャラが多く含まれますので、苦手な方は申し訳ありません。

目　次

第一章『邂逅　戦姫と魔剣』――1
第二章『終わる日常と始まりの夜明け』
『終わる日常』①――25
『終わる日常』②――39

第一章『邂逅　戦姫と魔剣』

『…死ぬ…かな…』

信じたくなかった。だから出てきた言葉だったと思う。

でも、その時の俺は誰がどう見たって助からなかったと思うんだ。

視界に映るのは、瓦礫と飛行機の残骸、そして炎。

動くのは左腕だけ。

他は感覚がない。

潰れたのか、千切れたのか。

考える余裕もなかった。

正直助かったとしても、死んだ方がマシだと思える状況なのに、

俺はずっと叫んでいた。

『…死にたくない、死ねないっ、死んでたまるかっ!!』

声が出なくなるまで叫び続けた。

『…だく…ない…ね…い』

とうとう声がでなくなった時、ハッキリと声が聞こえたのをよく覚えている。そいつ

は、俺にこう言った。
（求メヨ…力ヲ…契約ヲ…）
霞んだ視界の中で、俺は迷うことなく手を伸ばした。
伸ばしてしまった。

…

……

５月２６日
～某国際空港～
「おいっ、起きろよ！結弦！」
「んあ…」
神無木結弦が目を覚ますと、機内では乗客達が降りる準備をしていた。目の前のクラスメイト、木村も既に荷物を持っている。
「もう着いたんだ。てか俺の荷物は？」
「自分で取れよ。あとお前寝すぎな。」
「ハハっ、悪い悪い。起こしてくれて助かったわ。よし、じゃ行くか。」

軽く伸びをした後、手早く荷物を降ろす調子のいい友人に対して木村は少し溜息をついた。彼のそういった面は木村としても熟知した所だが、流石に呆れもするらしい。そういった木村のちょっとした鬱憤は

小言に変わって結弦に降りかかる。

「だいたい今朝だって俺が起こさなかったら、って、おいっ！聞いてんのかよ！」

「分かってるって、それよりさ、あれ。」

小言を遮るようにして結弦が指差した先には、一般の飛行場には場違いな物が数機並んでいた。

「戦闘機と、戦車？」

「さっき見かけた時より増えてる。なんかヤバいぞ。」

「いつもの勘か？」

「いや、いつもよりヤバい。」

結弦が真剣な表情で木村に返答したその時、窓の外が一瞬眩しい光に包まれ凄まじい爆発音と共に強い衝撃が彼等の乗る飛行機を襲った。緊急時の警報と乗客の悲鳴が響き渡り、後ろの乗客が前方に押しかけることで、機内は一瞬にして大混乱へと陥った。

「おいっ！結弦！早く行くぞ！こんなとこいたら死んじまう！」

「落ち着け！非常口が開かなきゃ俺らの座席じゃ降りる前に巻き込まれて踏み殺される

ぞ！」

結弦の言う通り、よく見ると前方では人が混雑してるばかりか転倒している姿も見える。それでも後方からは勢いよく前に移動しようとする連中ばかりだった。しかし、それよりも気がかりなのは友人の冷静さだ。結弦はこれだけの大混乱の中で、座席から動かずじっと外を見つめている。

「木村、ヤバいどころじゃないぞこれ」

「なんだよ！何が見えるんだよ！」

木村が言うと、結弦は窓の外、燃え盛る戦闘機と戦車の方向を指さした。

「…ノイズだ」

〜S．O．N．G本部〜

「…ノイズ、だとぉ!!」

S．O．N．G総司令官である風鳴弦十郎が驚きの声を上げる。彼等にとって襲撃は想定内の事態であったにも関わらず、司令室内にはイレギュラーを知らせる警報が鳴り響いていた。

「はい！アルカ・ノイズではなく、この反応はノイズです!!」

「馬鹿なっ！バビロニアの宝物庫が再び開かれたとでも言うのか！」

「いえ、それは有り得ません。」

　司令室中央に立つ金髪の少女エルフナインは驚きを残したまま、しかしはっきりと断言した。
「唯一解放可能なソロモンの鍵が失われた以上、宝物庫が開く事は有り得ません。そもそもフロンティア事変の折、宝物庫内のノイズも全て消滅しているはずです。」
「だが、現にノイズは再び現れた。しかも『アレ』を輸送するタイミングで、だ！」
「ええ、だからこそ今回も…」
『ゴチャゴチャ御託はあとにしなっ!!今更ノイズ！片っ端から吹っ飛ばしゃいいっ!!!』
　豪快な台詞回しが2人の会話を遮り司令室に響く。
『雪音の言う通りです。司令。事の真意はまず目の前のノイズを切り伏せてからっ！』
　凛とした声がそれに続くようにして応えた。
「うむ！お前達、任せたぞ！しかし、決して無理はするな!!」
『へいき、へっちゃらです！師匠!!』
　最後にハツラツとした声が司令室に響き、先程までの異様な雰囲気を見事にかき消して見せた。しかし、先程まで会話していた2人、風鳴弦十郎とエルフナインは依然として怪訝そうな表情を浮かべている。
「（まさか、本当に発現するというのでしょうか…神話に遺るという『ラグナロク』が…）」

〜某国際空港、滑走路〜

開いた非常口から乗客が次々と滑り降りる。しかし、滑り降りた先はすでに炎に包まれ、その奥からは異形のバケモノが群れをなして忍び寄っていた。

「くそっ、辺り一面ノイズだらけじゃねえか!!」

「木村！あそこだ！あそこだけ火の手が薄い！走るぞ!!」

「えっ!?お、おう!!」

「皆も！こっちだ！頼むから走ってくれ!!」

結弦の誘導に従い乗客達は燃え盛る火の合間を縫うようにして走り抜けていった。

「よし、なんとか逃げられそうだな！」

「バカ木村！わかりやすいフラグ立てんなよ！」

『『キャアアアアアア!!』』

「それ見たことか!!」

叫び声を聞いた瞬間、結弦は踵を返して悲鳴の上がる後方に向かって駆け出した。

「おいっ！何してんだよっ！」

「助けに行く！お前は先に逃げろ！死ぬんじゃねえぞ!!」

「ぐっ、お前もな！絶対死ぬんじゃねえぞ!!」

自分とは逆の方向に向かう友人の姿を見て、結弦は少しホッとした表情を見せたが、

すぐに気持ちを切り替え真剣な眼差しで悲鳴が上がる方向を見据えていた。
「死なせない、誰も死なせない！」
（あの時みたいに…）
脳裏にうっすらと浮かぶのは、今と同じように燃え盛る炎。自分に優れた力などなくても、今出来ること、やるべき事をやると誓ったあの日の光景だった。決意を嘘にしない為に。
そして、彼が向かった先では、今まさにノイズが1人の女性に襲いかかろうとしていた。
「っ!!」
間一髪のところで女性をかばいそのまま横に転がった。
「大丈夫ですかっ!?」
声をかけたが、女性はすでに気絶している。はっとして前を向くと、1体のはずのノイズが次々と分裂し、やがて彼の周りをすっかり取り囲んでしまっていた。
「ウソ…だろ…」
必死になって辺りを見渡すが、彼の脳内ではすでに分かりきっていた。活路等どこにも無いのだ。
恐怖の感情よりも、悔しさが彼を苛んだ。

「やっぱり、俺じゃ守れないのか…」
そう呟き諦めたように目を閉じると、音だけが鮮明になった。
燃え盛る炎の音、遠くに響く爆発の音、ノイズの躙り寄る音、自分の心臓の鼓動、そして…
『Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ』
歌が聴こえた。
今まで聴いたことのない、綺麗で、力強い、歌。
目を開くと先程まで辺りを囲んでいたノイズの姿はなく、舞い上がる炭を背にし、その身に鎧を纏う凛とした少女の姿だけがそこにあった。
「あ、君が、ノイズを…？」
「はい！もう大丈夫ですよ！私が皆さんを守りますから!!って、うわわわ！お兄さん、頭から血が!!だっ、だだ大丈夫ですか!?」
「え、ああ。ちょっと切っただけです。大丈夫！」
「ほんとですか!?よかったぁぁぁ」
大袈裟なリアクション、ケガに気づいた時の動揺の仕方、先程までの凛とした顔つきとは違う緩んだ顔つきで笑う少女を見て、張り詰めていた結弦も緊張がほぐれ笑いがこぼれた。それ程までにこの少女、立花響の笑顔には力があった。

「よし！じゃあ、えーっと、、」
「ほえ？」
「えーっと、なんて呼んだらいいですか？」
「え、え、あ、私ですか!?」
「いや、君しかいないから」
「立花響です！えーっとお兄さんは？」
「俺は神無木結弦、結弦でいいよ。じゃあ、逃げ切るまでよろしくな！響ちゃん！」
「ひ、響ちゃん？わ、なんか恥ずかしい…」
「ん？どうした、響ちゃん？」
「ひゃい！いえ、大丈夫です！って、うわー、しまったぁぁぁ」
　先程気絶した女性を抱き抱え、走り出そうとするその後で響は大声を上げ蹲っている。
「あのー、響ちゃん？」
「うう、一般の方には秘密にしなきゃいけないんで、本当は名前も機密事項だったのにうっかりしゃべっちゃいましたぁぁぁ、ぁぁ、また師匠に怒られる…」
「…大丈夫です。何も聞きませんでしたから、って事には？」
「ならないです…」

「よく分からないけど、ご愁傷様です…」
「うぁーー!」
叫ぶ響を起き上がらせ、ようやく結弦達は避難を始めたのであった。
～S．O．N．G本部～
「うぁーー!!」
先程までの響の様子が司令室のモニターに映し出されている。その様子に、風鳴弦十郎は溜息を、その他の職員は笑みを浮べていた。
「司令、どうしますか?」
弦十郎の後から現れた緒川　慎次が尋ねる。
「先程の少年か?避難後に機密保持の為の説明を受けてもらうが、データを見てみると意外と面白い人材かも知れんぞ?」
「はい、機内のカメラ等も確認しましたが、混乱したあの状況下での冷静さ、分析力、それに行動力ですね。どれをとっても18歳の高校生とは思えません。」
「うむ、それに率先して人を助ける心意気も見事なもんだ。まぁ、少しばかり無茶をやりそうだが、うちの弟子に比べれば可愛いもんだな」
「わかりました、それでは避難後は司令にお任せします。」
「おう、招待だけは頼んだぞ」

「了解です、それでは。」
　会話を終えた弦十郎は再びモニターに目を移す。ノイズの撃退、避難誘導はここまで順調に運んでいるが、敵の標的であるはずの『モノ』へのアクションが一向に見られない。それが違和感を感じさせたのだ。
「司令、天羽々斬及びイチイバル、当該地域のノイズを殲滅。まもなく護衛対象の元へ到着します。」
「よしー・さぁ、これであちらさんも動くことだろう。」
　～某国際空港、専用格納庫前～
　青と赤の鎧を纏った２人。風鳴翼と雪音クリスは、護衛対象である輸送機の前に到着した。旅客機周辺の惨状に比べて、この周辺だけが明らかに攻撃を受けていない事が２人にも不気味な違和感を残していた。
「敵さん一体何が目的だ？空港襲撃なんて大それてんだ。間違いなくコイツが本命のはずだけどな。」
　クリスが怪訝そうな表情で輸送機を叩いてみせる。
「やめろ雪音、一応そいつは危険物だ。本来なら我らがここまで近づく予定ではなかったのだぞ。」
「万が一の起動を避ける為に、ってか。」

「あぁ、それともう1つ、例の『咎人』と呼ばれる組織だ。奴らは『コイツ』を使って世界を救うと言った。」
「あたし達が起動を避けても、そいつらは容赦なく起動させに来るってことだろ？心配しないでくださいよ先輩！元よりこっちは、後輩の仇討ちだ！絶対ぶっ飛ばしてやる!!」
『『ふふふ』』
「っ!!何奴っ!!」
　咄嗟に構えを取る翼とクリスの頭上、輸送機の上に見える人影が不気味に微笑んでいた。
『ぶっ飛ばすそうですよ、アンネリッタ？』
『出来るならしてもらいたいわね、ベルムリッタ？』
　目の前に佇む白と黒の少女。片方は全身白色の鎧を身に纏った少女、もう片方はそれと正反対に全身黒色の鎧を身に纏っていた。その様相に異様なものを感じた翼は一瞬刃を下げるが、クリスはそのタイミングで引き金を引いていた。
「はっ、お待ちかねだぜご両人!!あいつらの仇討ち！やらせてもらう!!」
　無数に打ち出される弾丸は、白と黒の少女を的確に捉えていた。彼女達は弾丸を避けながら上空に飛び上がり、舞うようにしてクリス達の後方、輸送機から離れた場所に降

り立つ。クリスは着地の瞬間を見逃さなかった。
「コイツでしまいだっ!!」
ーＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＰＡＲＴＹー
脚部から放たれるミサイルが着地寸前の少女達を捉え、大爆発を引き起こした。雪音クリス自慢の必殺技の１つだが、翼とクリスに安堵の表情は無い。着弾した時点から絶えず聞こえる笑い声がその原因だった。
「ちっ、無傷かよ」
『無傷ではありませんわ、アンネリッタ？』
『そうだね、毛先が少し焦げたよ、ベルムリッタ？』
『美しい髪ですのに、野蛮ですわね、アンネリッタ？』
『野蛮人には美しさが理解できないんだよ、ベルムリッタ？』
「なっ！」
「落ち着け雪音！安い挑発だぞ！」
「くぅぅ、いいかよく聞けてめーら！うちの先輩の髪の方がよっぽど綺麗でサラッサラだぞ！ちなみにあたしの髪も悪くねえ！」
「ゆ、雪音！何と張り合ってるんだ！落ち着け！」
啖呵を切ったつもりのクリスの顔がみるみるうちに赤くなる。なだめている翼にし

ても、若干の照れを隠しきれていない。
『そろそろ、お仕事しましょうか、アンネリッタ？』
『コントを見に来たわけじゃないからね、ベルムリッタ？』
「くっ、貴様ら！一体何者だ！」
　吠える翼に応えるように、彼女達はお屋敷の使用人がするような仕草に丁寧な口調で話し始めた。
『『これはこれは失礼を致しました。私共、『咎人』に属する者。主の命により、そちらの剣を頂戴しに参りました。申し遅れましたが、私共の名は、』』
『『双星』』
『ベルムリッタ』
『アンネリッタ』
『『と申します。以後お見知りおき下さいませ。』』
「剣を、頂戴する、だと？」
『『貴方様の事ではございませんので御安心下さいませ。』』
「くっ!!」
「先輩。あたしが言うのもなんだけど、落ち着け」
「私は冷静だ！」

『『私共の主が欲するのは、完全聖遺物『レヴァンティン』、滅びの力を宿す魔剣でございます。』』

〜某国際空港　滑走路〜

「はぁ、はぁ、だいぶ走ったけど…響ちゃん、これどんどん空港から離れてない？」

「はい、今向こうの避難が上手くいってないみたいなんで、こっちのヘリポートに直接迎えが来てくれるんですよ！」

「そういうことか…確かにノイズも施設側ばかり狙ってたし、こっちに来てくれれば安心だね」

「え、ノイズの攻撃してる場所わかったんですか？」

「そりゃ、見てれば誰だってわかるよ。人の逃げる方向とかね。なんかこっちに来させたくないように見えた。」

「ほえー」

「その感じ、俺変な事言ったかな？」

「いやいやいや、私ぜんっぜん分からなかったから、結弦さんすごいなーと思って」

談笑しながら待っていると、救助のヘリはすぐに到着した。結弦は抱き抱えたままの女性と共に手早くヘリに乗り込む。座席に女性を降ろした後、響にもその手を伸ばした。

「響ちゃんも、早く！」

伸ばした手を見つめる響だが、一向に手を掴む素振りがない。首を横に振ってその手を拒むが、顔つきは結弦を助けた時に見せたあの凛とした表情だった。

「ごめんなさい。まだ戦ってる仲間がいるんです。だから私、早く助けに行かなくちゃ！」

戦ってる仲間、助けに行く、およそ少女の口から飛び出す台詞ではなかったが、それが返って結弦を安心させた。彼女は戦場に身を置くもの。できる事も、やらなきゃいけない事も自分よりずっと多いのだと、そう感じたからだ。

「響ちゃん」

「はい！」

「負けんな！」

「っ！…はい！行ってきます！」

互いに拳を作り、それを軽く当てる結弦と響。

精一杯の笑顔で見送った結弦に、響もまた精一杯の笑顔で返した。

仲間の元へ駆ける彼女の心は何故か高揚している。少しむず痒いそれは、力が溢れるような感覚にも似ていた。

～某国際空港　専用格納庫前～

銃声と爆音の中、剣戟が鳴り響く。戦場に鳴り響くすべての音を紡いで、歌姫は魂を震わせていた。

「～蒼ノ一閃～!!」

「ーＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＦＵＧＡー!!」

２人が繰り出す必殺技は、確実に相手を捉えている。しかし、相対する少女達は未だに無傷であり、そればかりか疲労した様子も見られなかった。もちろん、翼とクリスも未だ余力を残している。それでも、膠着した戦況を打破する一手を掴めずにいた。

「ちっ、なんであいつらあんなピンピンしてやがんだっ！」

「大技はすべて防がれている。が、小技では奴らを仕留め損なうか」

「なら、ゴリ押ししかないんじゃねーか？」

「仕方ない！やるぞッ！雪音!!」

「ああッ！い、く、ぜ、先輩ッ!!」

翼が生み出す炎の両翼にクリスの放った矢が交わり、まるで巨大な火の鳥が顕現したかのような一撃が、ベルムリッタに直撃する。アンネリッタはその後で片目を閉じ、もう片方の目でそれを見つめていた。

『この攻撃、流石にイージスが耐えきれませんわ、アンネリッタ』

『もう少しだよ、頑張って、ベルムリッタ』
「あいつら、何をしていやがる！」
「片方に防御を任せ、片方は…まるで記録」
『まだですの、アンネリッタ？』
『あと少し、あと少しだよ、ベルムリッ』
「どぉおりゃぁあっ!!!」
　響の渾身の飛び蹴りが、アンネリッタの不意を付いた。咄嗟に左手でカバーしたが、衝撃に耐えられなかった彼女の体は、地面に激突するまで吹き飛ばされる。防御を任されたベルムリッタは、受け止めていた攻撃を別方向へ受け流し、アンネリッタの元へ飛んだ。
「立花響！参上！さぁ、どっからでもかかってこい！」
「おい、バカ。かかってくる相手は今お前が吹っ飛ばしたよ」
「え、そうなの!?よし、それなら大勝利だね！」
「立花、素直に助かった。と言いたいところだが、不意打ちは恥ずべきだぞ」
「え、えええーーー！」
　吹き飛ばされたアンネリッタの落下地点、そこから突如として地鳴りのような音ご鳴り響いた。傍らには狼狽えるベルムリッタの姿が見える。起き上がったアンネリッタ

は、かつて暴走を引き起こした響が放つ獣のような凶暴性を滲み出していた。
『鎮まりなさい、アンネリッタ！』
『グッ、ガァッ!!クソガキ…ドモ、ゴロスッ!!!』
『ダメ！アンネリッタ!!』
『ゴァァァァ!!!!!』
　叫んだアンネリッタからは無数の黒色腕が伸び、一斉に響達を攻撃し始めた。
「なんだっ、これ！」
「くっ、この手数は…」
「捌き、きれないっ」
　一瞬にして黒に飲み込まれる3人。立ち上がりこそしたが、すでにその身に纏うギアは所々破損が見られ満身創痍と言った様相を表していた。しかし、それでも狂獣と化したアンネリッタは攻撃の手を休めない。更に黒色の腕を生み出し、今度は無差別に振り回し始めた。
「くっそ、体が」
「動け、今動かなければ」
「はぁ、はぁ、はぁ、、、えっ」
　突如息を飲んだ響の視線の先には、先程結弦を乗せたヘリの姿が見える。結弦が響達

を迎えに行くため、女性を下ろした後戻ってきたのだ。ヘリはさほど近いところにはいない、だがプロペラの発する音は獣の興味を引く上では十分すぎるほどだった。
「逃げて、もっと高く！逃げて!!」
叫びを上げる響、一瞬だけヘリの中の結弦と目が合った気がしていた。
『ガァァァ!!!』
黒い腕はヘリの尾翼を掠めただけだったが、バランスを崩したヘリは左右に揺られ、回転しながら輸送機に直撃するようにして堕ちた。
「う…あ…ウア゛ア゛ア゛ア゛ッ!!!!」
悲痛な叫びが響いた。

〜　炎上する輸送機〜

……
「…死ぬ…かな」
炎の中、結弦は静かに呟いた。　自身の死を、信じられなかったからだ。
「…パイロットさん……すいません」
戻ろう等と言い出さなければ、ヘリのパイロットは死なずに済んだ。はっきりと姿は見えないが、ヘリの残骸からは微かに人の腕のようなものが見える。

「…響ちゃん…ごめん」

力になれると思っていた。自分にできる事、やらなきゃいけない事なのだと思って戻った。その結果、1人を巻き込み、1人を悲しませた。家族の事も考えればもっと多くの人が、自分の思い込みで悲しむことになる。彼は、自分の無力さと無知を呪った。

やがて火の手は勢いを増し、辺りの残骸が高熱により崩れはじめた頃、結弦は声にならない声で叫んだ。

「…死にたくない、死ねないっ、死んでたまるか！」

生きて、この罪を償う。

償えなくても、自分の犯した罪の分、誰かを助ける。

だから死ねない。

「…し…ね…な……い」

遂に声も枯れ、それでも叫び続けた。

『求メヨ』

（求める…？）

『求メヨ、力ヲ、力モツ者、契約ヲ』

（よく聞こえない…あんた誰なんだ…）

『求めよ、我は魔剣。新たな主、力持つ者の声を聴き、契約を果たさん。』

（契約って、何をするんだ）
『ただ、求めよ。新たな主、力を求めよ。我はその声を聴き、力を与える。』
（力…、それがあれば俺も助けられるのか…）
『全ては主の望むままに』
　霞む視界、唯一動く左手の先には、『何か』があった。
「……力を」
「…与えろっ!!『レヴァンティン』!!!」
　光、閃光は柱となって天高くまで登る。
　～S．O．N．G本部～
「莫大なエネルギー量を確認！」
「それに伴い、新たなアウフヴァッヘン波形を感知！これは…」
「…レヴァンティン、だとぉ!?」

　～某国際空港　専用格納庫前～
「…ぅ…あ…ウア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!!」
「どうした！立花！立花！」
「おい、なんなんだ！あのヘリに誰が乗ってたんだ！」

「結弦…さん…、仲良くなれたのに…」
涙を流しながらも響はアンネリッタを睨みつけた。拳を握り唇を噛み締めながら睨み続けた。
「動け、動け、動け!!」
それでも響の体は動かない、もちろんそれは他の2人も同様だった。
そんな3人に獣は再び黒色の腕を無数に伸ばす。ただ相手を撲殺する為に放たれた無数の拳が3人の眼前に迫る。
刹那にも満たない時間、黒色の腕は跡形もなく消え去った。
突然現れた光が腕をすべてかき消したのだ。
「…結弦さん?」
全身覆う炎のように揺らめく焔色のオーラと巨大すぎる剣を携えているその人物は、紛れもなく響の知る神奈木結弦だった。
腕をかき消されたアンネリッタは尚も無数の手を伸ばすが、巨大な剣から放たれる閃光により、辺りは光に包まれた。
光が収まると、そこにアンネリッタベルムリッタの姿はなく。炎を纏った結弦だけがその場に立ち尽くしていた。
「…結弦…さん?ですよね?」

響がそう尋ねると、結弦は振り返りヘリで別れた時と同じように微笑んで見せた。響もそれに応えるようにして笑う。

それを見届けた結弦は静かに瞳を閉じた。

第二章『終わる日常と始まりの夜明け』

『終わる日常』①

『契約者が現れたそうですね。』

月明かりが差し込む薄暗い空間の中、宙に浮く鏡の中にはローブを纏った妖艶な女性が映っている。

女性は自らの前に立つ魔術師風の男に向け厳かな声で語りかけた。

「その通りです。現在、契約者は敵方に身を寄せているようですが、いかがしましょう？」

『焦る事はありません。少なくとも魔剣の切っ先がすぐにこちらを向くことはないのです。ならば、今は他の手札を揃える事を優先しましょう。』

「承知しました。では、回収したデータの解析と調整に専念させていただきます。」

そう言った男は、闇に呑まれるようにして音もなくその場から消え失せた。
『頼みましたよ。』
そう呟くと、彼女は手を伸ばし、鏡の前には突如として結晶体が現れた。
結晶の中には神無木結弦の姿が映っている。
すると、彼女は結晶体に映る結弦の姿を、愛おしむ様に見つめ小さく笑みを浮かべた。

5月29日
～S．O．N．G本部　メディカルルーム～

「う・・・・」
目を覚ました結弦の視界には知らない天井が広がっていた。
考えの纏まらない頭で辺りを見渡すと、至る所に見慣れない機材が並んでいる。
「(・・・まるでSF映画だ。)、痛っ・・・。」

一頻り辺りを見回した後、起き上がろうとする結弦の体に激しい痛みが走る。
「なんだこれ、筋肉痛・・・？」
苦笑いをしながら、なにげなく痛みのある右腕をさする。
その瞬間、彼の脳裏に、炎に包まれた際の痛ましい光景が鮮明に蘇った。
辺り一面に燃え盛る炎。
飛行機とヘリの残骸。
その中に見える人の腕。
そして、自らの体から千切れた右腕と、潰れた両足。
「う、あぁ！あぁあああ!!!!」
フラッシュバックを引き起こした彼は混乱し、奇声を上げてベッドから転げ落ちた。
全身の筋肉が感じる痛みと、転げ落ちた衝撃の痛みに蹲る彼には、続いて激しい吐き気がこみ上げる。
「ウッ・・・、」
その時、突如としてメディカルルームのドアが開き、金髪の少女を先頭に数人の男女が部屋へ入ってきた。
この施設の医療スタッフであるのだろうが、パニックを起こした今の彼にそれを理解する事はできなかった。

差し出された手を振り払い、尚も奇声をあげる彼は拘束され、鎮静剤が投与される。
意識を失う刹那、金髪の少女が自分に向け『ごめんなさい』と呟く。彼はそこで意識を失った。

――――数時間は立っただろうか。
まるで頭を強く打ったような鈍い痛みを感じて目を覚ました結弦が目にしたのは、見覚えのある特徴的なくせっ毛をした茶髪の少女だった。
彼が目覚めたことに気付いた少女の瞳には、溢れそうな程に涙が溜まっている。
「結弦さんっ!よかった・・・本当によかったぁ。」
強く結弦の手を握る少女。その少女の事はよく覚えていた。
今は鎧を纏っていないが、目の前にいるのは間違いなく自分の命を救ってくれたあの少女だった。
「おはよう、響ちゃん。あと、ごめん。」

謝罪の言葉を聞いて、響は痛みを感じる程強く彼の手を握り、勢いよく首を横に振る。
「ごめんなんて、言わないでください。私の方が、よっぽど、ごめんなさい。守れなくて。それに・・・」
「それに・・・？」
「それに・・・助けてくれて本当にありがとうございました！」
「・・・え？」
続けて感謝を述べた響きであったが、結弦は不思議そうな顔で彼女を見つめていた。
「俺が助けた？助られたならわかるけど・・・」
「え、覚えてな」
「ダメです！響さん！」
突然、大きな声が会話を遮る。声の主は、先程結弦に『ごめんなさい』とつぶやいた金髪の少女だった。
「彼の心は、まだ安定していません。無理に思い出させるような事を言ってはダメですよ。」
「エルフナインちゃん・・・。ごめん・・・。」
「・・・エルフナイン？」
「はい、僕の名前はエルフナインです。自己紹介が遅くなってしまい申し訳ありませ

ん。」
「そんな、謝らなくていいよ。俺の方こそ、まだ自己紹介してなかったよね。神無木結弦です。さっきは落ち着かせてくれてありがとう。」
「覚えているんですか？」
「多分だけど、ごめんなさいって言ってくれた子だよね？」
「あう、そうです。ごめんなさい。」
「だから、謝らなくていいから。ね？」
「はい。ごめんなさ・・あっ」
結弦がいたずらそうに笑うと室内にほんの少し和やかな空気が流れた。
しばらくして話を聞くと、どうやらエルフナインは、彼が鎮静剤を打たれてから目覚めるまで、隣のモニタールームで彼のバイタルチェックを行っていたらしい。そして、ほんの数分前に響もこの部屋を訪れたのだと言う。
「そうか、迷惑かけっぱなしだったんだ。ありがとう、エルフナインちゃん」
そう言ってエルフナインの頭を軽く撫でると、彼女は頬を染めながら目を伏せたが、とても喜んでいるように見えた。年相応の可愛らしさ見せるその仕草は、結弦にもし妹がいればこんな感じかな等と、微笑ましい想像をさせる。
「えへへ・・・。はっ！いっいえ！これも僕の仕事ですので、気にしないでください！」

「ほんとその年で立派だね。今年でいくつになるの？」
「僕はホムンクルスなので、年齢は特にありません。ですが、皆さんからお祝いをしていただいたので今は1歳です。」
「ん？え、1歳？」
「結弦さん、それについてはまた後で説明してあげますから」
「あぁ・・・助かるよ。後で頼むね？」
　互いに苦笑いを浮かべる響と結弦の横でエルフナインは不思議そうな表情を浮かべていた。
　そしてしばらく談笑した後、結弦はずっと気にかかっていることを訪ね始める。
「色々話してたら気持ちが楽になったよ。ありがとう二人とも。もう大丈夫だから、あの後俺に何があったのか、教えてくれないかな？」
　――――――、静寂、部屋に流れる雰囲気が変わる。
　そらすことなくエルフナインを見つめる結弦に対して、少しの沈黙をおいた少女は意を決した表情で口を開く。
「それは・・・実際に見て頂いた方が良いと思います。」
「見る？」
「はい、今から連絡しますので、少し待っていてください。」

そう言った少女は椅子から立ち上がり、少し離れた場所で通信を始めた。
傍らでたたずむ響は、不安そうな表情でエルフナインを見つめている。
鎮静剤の効果で落ち着いたとはいえ、２人の様子は結弦に一抹の不安を抱かせるには十分だった。
ほんの少しの通信を終えて、エルフナインが再び結弦に近づいてくる。
「許可がおりました。行きましょう、発令所へ。」
～Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ本部　発令所～
「司令、お待たせしました。」
「おう！来たな！」
車椅子に乗せられて向かった先で待っていたのは、腕組みをした筋骨隆々の体躯をもつ男だった。
「まずは初めましてだな！俺の名前は風鳴弦十郎。ここの総司令を務めている。そして、今君がいるこの場所は超常災害対策機動部タスクフォース、通称Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇと言う国連直轄の組織だ。」
「国連直轄・・・」
「ん？」
「あっ、いえ、なんでもありません。俺は神無木結弦と言います。湾岸地区にある〇〇高

校の3年生です。この度は助けて頂いた上に治療までしてもらって本当にありがとうございました。」
「ああ、それについてはこちらも礼を言わねばならん。俺達の仲間を救ってくれた事、感謝する。」
「・・・風鳴司令。申し訳ないんですが、俺はその時のことをほとんど覚えていなくて・・・」
「そうか、やはりか・・・。わかった。では早速本題に入ろう。」
　弦十郎の視線が、急に厳しいものへと変わる。発令所内には緊迫した空気が漂っていた。
「今から君に見せる映像は、もちろん最重要の機密事項になる。見てしまったが最後、後戻りはできないと思ってくれ。それに加え、君自身の心にも、強いショックを与えるかもしれない。それでも、見るか？」
　あえて厳しい言葉を紡ぐ弦十郎。それでも、結弦の答えに変わりはなかった。
「・・・はい。お願いします。仮に、強いショックを受けたとしても、すぐにできるかわかりませんが、なんとかしてみせます！」
「・・・わかった。藤尭、やってくれ！」
「わかりました。モニターに4日前の戦闘時の映像を出します。」
　藤尭と呼ばれた男性が手元の操作盤を巧みに操る。一瞬のうちにして中央のモニ

ターに映像が流れ始めた。
「・・・なんだこいつ」
モニターに映し出されたのは、黒いオーラを纏いそこから無数の黒い腕を伸ばして叫ぶ赤い目をした怪物と、その前に蹲る3人の少女達だった。
結弦はその中に響がいるとすぐに気付いたが、恐らく仲間と思われる2人共々ボロボロになった姿を見て、言いようのない怒りに襲われ拳を握りしめた。
結弦は、大量のノイズを一瞬で倒してしまった響の強さを知っている分、この黒い何かが尋常でない戦闘力を有している事をすぐに理解できた。
そのうえで、この強大な存在を相手に、当時の自分はいったい何ができると信じていたのだろうか。
――――何もできるわけがない。
彼はそんな傲慢な思い違いをした自分自身がどうしようもなく許せなかった。
そして、怪物が伸ばす無数の黒い腕が再び振り上げられ、その腕は近くを飛んでいた1機のヘリを撃墜した。
「あれって俺が乗っていたヘリ・・・。そうか、この時こいつに攻撃されて、それでヘリが落ちて、その後・・・」
結弦の脳裏に再びフラッシュバックが起こり、続けざまに激しい吐き気が湧き上が

る。
　頭の中で鐘を鳴らされているような感覚と、湧き上がる吐き気を飲み込み、彼はモニターを見続けた。
　そして、ヘリは輸送機に激突し、小規模な爆発を繰り返て激しく炎上していた。
　炎上する輸送機の手前では、悲痛な叫び声を上げる響の姿がある。モニターを通してそれを見た彼は、傍らに立つ響を少し見上げた。
　気付いたのか、それとも見ていたのか、目が合った彼女は少し照れたように笑い、再びモニターに目を向ける。
　彼もそれに続いてモニターに目を向けた瞬間、炎上している輸送機から耳をつくような甲高い音と共に光の柱が上がった。
「ここからが本題の場面だ。よく見てほしい。」
　弦十郎がそう告げる。結弦は注意深く画面を見つめた。すると、次第に光は薄れ、中から人影が現れた。
「・・・これが、俺?」
　光の中から現れた結弦は、揺らめく炎のようなオーラを身に纏い、左手には巨大すぎる剣を携えて宙に浮いていた。しかし、よく見てみれば、彼の体は全身血に染まり、その体に右腕は無く、両足は有り得ない方向を向いたまま力なく揺れている。

「・・・くっ！」

突然、無傷のはずの腕と脚が疼き不快な痛みが走る。

気力を振り絞り再びモニターに集中した結弦だったが、自身の許容範囲を超える出来事の連続は、平時の彼が発揮する優れた状況判断能力を完全に奪い去ってしまっていた。

「(なんなんだ。あのボロボロなのが、俺？ありえないだろ・・・大体腕も脚もちゃんと無傷で・・・、それにあんな剣、一体どこで・・・)」

刹那、結弦の脳裏にある言葉が浮かびあがり、震える声でその言葉を呟いていた。

「・・・『レヴァンティン』の契約。」

それは小さな声だったが、近くにいた弦十郎、響、エルフナインの耳にははっきり届いていた。

その言葉を聞いた弦十郎は眼を閉じ、響とエルフナインは視線を下に反らす。つまるところ、彼らにとっても認めたくない事実であったのだ。

そんな彼らをよそに結弦が乾いた笑いをあげた。

「ははは・・・冗談・・・だろ・・・」

信じられないことに、結弦の右腕は徐々に再生し、ひしゃげた両足も今はぶれる事すら一切なく一見して力を取り戻したように見えた。そして、両手で剣を握りしめた結弦

は、目の前の黒い何かに向けて剣を振り下ろす。振り下ろされた剣からは迸る剣閃は、黒い何かを切り裂き、その太刀筋からは火柱が立ち上がり、重く低い爆発音を上げて遥か海の先までも続いていった。

やがて、爆発音が遠く薄れていった頃、地に降り立った彼が纏う炎の様なオーラは巨大な剣に吸い込まれ、剣は常人でも持てるサイズへと変わった後、粒子に分解して消え失せた。

モニターから映像が消えた後、発令所内にはしばらくの沈黙が続く。

言葉を発する者は誰一人おらず、当人である結弦は一連の信じられない光景を受け入れる事に囚われていた。

そんな中、最初に声を発したのはやはり弦十郎であった。

「これが、君に起こった出来事の全てだ。」

弦十郎に肩を叩かれた結弦は、その時ようやく悟る。

今何を思考しようとも、受け入れがたくとも、目にしたものだけが真実であり全てなのだ。

そんな結弦の体に恐れから震えが起こる。

彼は、自分の腕に血が滲む程強く爪を立て、必死に震えを抑えようとしていた。

そして深く息を吸込み、なんとか言葉を紡いだ。

「・・・まず、教えて下さい。俺は・・・何になってしまったんですか・・・？」

震える声で弦十郎に訪ねる。

恐れや不安を噛み殺そうとする彼の様子に意を決した弦十郎は、少しの沈黙の後、彼の問いに答える。

「――――君は、完全聖遺物の一つ、魔剣『レヴァンティン』と融合した。君がなったものとは、『魔剣』そのものだ。」

『終わる日常』②

――魔剣そのもの。

弦十郎の言葉が結弦に重くのしかかる。

「・・・俺はもう人間じゃないってことですか？」

「人間さ・・・ここにいる誰もがそう思っている。だが――」

「そう思わない人も・・・いるってことですよね・・・」

「・・・すまない」

「・・・いいんです。仕方ないですよ・・・普通に考えれば、怖い。人の体だけど、中身は、もう化物みたいなもんなんですから・・・」

無理に笑う結弦の声はやはり少し震えている。

そんな彼の手を響が優しく握りしめた。

「・・・響ちゃん」

「・・・結弦さんは、化物なんかじゃありませんよ。だって、さっきも笑って話ができたじゃないですか。結弦さんは、あの時空港でたくさんの人を助けようとしてた結弦さんのままです」

「でも、響ちゃん、俺は・・・」
「・・・私はっ!・・・昔、全部吹き飛べって衝動に飲まれて街を・・・壊しました。それは私が弱かったから・・・、でも結弦さんは違う!あんなにボロボロになってたのに、私達を助けてくれた!だから、自分の事、化物みたいだなんて、そんなふうに言わないでください」
響が力強い眼差しで結弦を見つめる。
きっと響自身にとって、今の話は結弦には計り知れない程の後悔をはらんだ記憶なのだろう。だからこそ、その瞳からはそれを乗り越えた彼女自身の強い意志を感じる事ができた。
「・・・ありがとう、響ちゃん」
そう呟いて響の手を握り返した結弦の瞳から涙がこぼれる。
一生懸命に自分を励まそうとする彼女の健気な優しさがたまらなく嬉しかった。
「・・・風鳴司令。大きいことを言ったのに、こんな有様ですいません。もう、本当に大丈夫です。続きを聞かせて下さい」
涙を拭った結弦の声に、もはや先程までの震えは一切無い。
「いいのか?」
「はい。こんなに励ましてもらって、まだウジウジしてたら男じゃないですよ」

「・・・ああ、わかった。では、まず君が魔剣そのものという根拠について説明しておかなければならんな。エルフナインくん」

弦十郎が呼ぶと、エルフナインは手元の端末を操作し数枚の写真を表示する。

それらは全て人の形を移した写真だったが、知識の無い結弦でも理解できるほど違和感を有していた。

なぜなら、その写真には多くの白い部分が存在し、特に結弦が負傷した箇所と思われる部分は白一色に染まっていたからだ。

「・・・これは?」

「こちらは結弦さんの体内組織を投影した写真です。骨格や臓器をこちらの部分ですね。そして、各所に点在する白い部分は、結弦さんの細胞ではありません。今は未だ詳しいデータを解析中ですが、波形のパターンから『レヴァンティン』であると見て間違いないです。つづいて、２枚目の写真を見て下さい。」

「少しだけど、白い部分が減ってる?」

「その通りです。これは1枚目から２４時間後の投影結果になります。信じられない事ですが、負傷部分を補うようにして密集していた『レヴァンティン』が、徐々に結弦さんの細胞と全く同じ物へ変質しているのです」

「ちょっと待って、『レヴァンティン』って一応魔剣なんて言われてるくらいだし金属だ

よね？」
「・・・はい、どのような成分構成かは判明していませんが、間違いなく金属です。お気づきの通りそれは本来有り得ない事ですが、本当にあなたの体に起こっている事なんです」
結弦は驚きのあまり言葉を失う。
『レヴァンティン』が発現した奇跡ともいえるテクロノロジーは、あくまで一般的な知識や常識しか持たない結弦には衝撃が強すぎるのだ。
「そして、これが最後の３枚目です。こちらは先程の写真から更に２４時間が経過した時点での結果になりますが、この時点ではすでに各所の物質がすべて変換を終え、結弦さんの細胞として機能していました。ですが、それに伴って結弦さん自身から常に微弱なエネルギーが放出しだしたのです」
そう言われた結弦が自身の体を見回すが、特別に変化した部分や感覚などは一切なかった。
「ご自身でも気づかないほどの微弱なエネルギーでしょうが、それは間違いなくあの戦闘で結弦さんが使用した力と同種の物です。これは仮説になりますが、恐らく聖遺物のコアすらも結弦さんの細胞に変質し一体化していると考えられます」
「それで、魔剣そのものか・・・、勝手なイメージだけど、手術で摘出したり除去したり

もできないってことだよね？」
「はい、その通りです。悔しいですが、現存する技術では、結弦さんと『レヴァンティン』を分離する方法はありません。加えて、『レヴァンティン』に関わる伝承はそのほとんどが破壊を象徴するものばかりで、今回の症状の解明に繋がりそうな記述は一切残っていませんでした」
「なるほどな。ちなみに、どんな伝承があるの？」
「・・・神話曰く、世界を焼き尽くし【ラグナロク】と呼ばれる終末を引き起こした剣である。と、記述されています。他の伝承も、若干の違いはありますがほぼ同様の内容です」
「【ラグナロク】・・・」
「・・・結論を出すには早すぎるかもしれませんが、敵の目論見の一端にこの伝承が関わっている可能性は否定できません。弦十郎さん、そろそろ敵について結弦さんにもご説明した方が・・・」
「うむ、そうだな・・・。では、それは俺から話そう。友里、データを出してくれ」
「了解しました」
　再度モニターに映像が表示される。モニターの中では、緑・そしてピンク色のギアを纏った2人の少女が輸送機を守りながらノイズと交戦している。

「今から9日前、欧州のとある政府から要請をうけた俺達は『レヴァンティン』の輸送任務に携わっていた。その際、現地入りしていた俺達の仲間がノイズの襲撃を受けたのだ。これはその時の戦闘記録になる。今映っている2人は、暁切歌くんと月読調くん、どちらも俺達の仲間だ」

調と切歌が次々とノイズを撃退していく。

そして、一際大勢の群れの中心から竜巻が起こり、その中心からは白銀のギアを纏った女性が現れた。

「えっ、あの、この桃色の髪の人って、もしかしてマリア・カデンツァヴナ・イヴ？」

「ああ、そうだ。マリアくんもS．O．N．Gの一員、俺達の仲間でな。まぁ、彼女の場合は知名度があって当然だな。」

――マリア・カデンツァヴナ・イヴ

突如として現れ数か月の間に歌姫としての地位を確立した世界的に有名なアーティストだ。そんな歌姫が、ノイズを物ともせず次々と切り裂き殲滅していく。

「強い・・・。ノイズがまるで何もできてないじゃないですか」

「彼女たちの実力なら通常のノイズ等まるで問題ない。だが――」

視線を移した弦十郎に気づき結弦も食い入るようにモニターを見つめる。

周辺のノイズを全て撃退した後、離陸する輸送機を見送る3人が何かに気づき再び武

器を構えた。

――――

『何者かしら？』

　マリアが剣を向けた先には、魔法使いのような恰好をした男が一人佇んでいた。男の顔は月明かりに照らされ辛うじて見える程度だが、およそ男性とは思えない美しい顔立ちをしている。

『こんばんは、お嬢さん方。尋ねる前に、まず自ら名乗るべきでは？』

『必要ない』

『そうデス！悪党に名乗る名前なんかねーデス！』

『ふふ、礼儀知らずなお嬢さんだ。まぁ、いいでしょう。私の名は、ドレッグス・ヴィーペル。『咎人』に属する者です。それでは、自己紹介も済んだことですし、戦いましょうか？』

　魔法使いのような外見とは裏腹に男が取り出したのは細見の長剣だった。ゆらりとした構えを取る男の姿に、対峙しているはずの３人は呆気にとられたのか明らかに油断している。

『あら、ずいぶん似合わない獲物を使うのね？』

『ええ、私もそう思いますよ』

そう呟いた男の体が消え、マリアの目の前に突如として現れる。
『なッ・・・!』
『・・・未熟ですね』
そして、男の掌底がマリアの腹部をとらえた瞬間、彼女の体は凄まじい勢いで弾き飛び後方に止まっていた別の輸送機に叩きつけられた。
『マリアッ!!』
『余所見はいけませんよ?』
『ッ!切ちゃん!後ろッ!!』
調の声にはっとした切歌が後方から忍び寄る男の剣をぎりぎりの所で受け止めたが、同時に放たれた掌底をよける事が出来ずマリアと同じように後方に弾き飛ばされた。
『ふむ、油断しているとは言えこの程度ですか。・・・ほう?』
男が振り向くと、調は淡い光を放ちながら美しい歌声を奏でていた。男は落胆した表情を見せながらため息をつき、調に向かう。
『――Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂ・・・かはッ!!』
絶唱の旋律を唱える間もなく、男は調を吹き飛ばした。
『・・・唄わせるわけないでしょう。あなた方はもう少し戦いを知るべきですね?』
余裕の表情を浮かべた男に突如短剣が飛んでくる。男は難なくそれを避け、飛んでき

た方向に視線を送った。
『ふむ、立ち上がれるだけの力はありましたか』
　そこには先程吹き飛ばされたマリアの姿があった。
『このままで……終われるものかッ!!』
　剣を抜いたマリアは凄まじい速度で男に向かっていく。
　繰り出される剣閃は鋭く、そして確実に男の急所を狙って放たれるが、男は嬉々とした表情で剣をいなし続けていた。しかし、無数の剣閃は徐々に速度をあげ次第に男の衣服に触れ始める。そして、ついに剣が頬をかすめた時、男は今までいなしていた剣を弾き、間合いを取るようにして後方へと飛んだ。
『先程とはまるで別人、良い腕でした。やはりあなた方は窮地にあってこそ、思いがけない力を発揮するようだ。今回は、それが見れただけ良しとしておきましょう・・・」
『待ちなさいッ!あの子達にこんな事をして・・・ただで逃がすものかッ!!!』
　呼びとめに振り返る男は、まるで路傍の石を眺めるような目でマリアを見る。
『・・・何をバカな事を。私は、あなた方を見逃してやると言っているのです。しかし、焦らずとも我等の目的の為、またすぐお会いできるでしょう。その時までに、せめて殺す価値くらいは見いだせるようになって下さい。それでは――――』
　そう言うと、男は手にしていた結晶を地面に叩きつけ、そこから発生した光に飲まれ

るようにして消えていった。そして、映像自体がそこで停止する。

流れた映像の一部始終を見た結弦は驚愕のあまり絶句していた。
彼自身、少なからず武術の心得がある故に敵の持つ計り知れない実力をモニター越しに嫌という程感じたのだ。
「・・・なんなんですかあいつ。まるで格が違う。あんなのが、敵？」
「ああ、そうだ。だが、脅威なのは奴だけじゃない。空港を襲撃してきた連中も、圧倒的な力で俺達に襲いかかってきた。もしかすると、奥には更なる実力者が控えているしれん。そして、そんな力を持った連中が狙っているもの、それが『レヴァンティン』だ」
「そんな奴らが俺の中の『レヴァンティン』を・・・」
「君には申し訳ないこと続きだが、今後戦闘は更に激化するだろう。それが起動した以上、奴らもそれなりの戦力を投入するはずだからな」
「…皆さんが強いという事はなんとなく分かります。それでも、このあいては……」
「確かに強大な相手だ。だが、何も恐れる事はない。俺達が絶対に君を守ってやる!!」
「でも、それじゃ司令達が危険な目に・・・」
「問題ない！こう見えても、俺達は結構な修羅場をくぐりぬけているんだぞ？」
「司令・・・」

豪快に言い放つ弦十郎。
それに伴うようにして発令所にいる全員が結弦の方を向き、皆一様に大丈夫といわんばかりの表情を見せていた。傍らに立つ響やエルフナインも同じような表情で結弦に笑いかける。
「ボク達に任せて下さい！」
「そうです！平気、へっちゃらですよ！」
「・・・２人とも」
結弦の胸に暖かい物がこみ上げてくる。そして、結弦はようやく安心したように微笑んだ。

「弦十郎さん、伝えなくてよかったんですか？」
結弦が発令所から出て行った後、不安そうな表情をしたエルフナインが弦十郎に問いかける。

「伝えずとも、今までの話で理解してしまっただろう。それよりも今は上からの命令を撤回させる為に根回しが必要だ」

命令という単語を聞いたエルフナインが怒りに震えその小さな手を強く握りしめる。

彼らは上層部や日本政府からとある要請を受けていた。

――『レヴァンティン』に封印処理を施し、深淵の竜宮へ隔離せよ。

「上層部は、あくまで結弦さんを物としか認識していないのですね・・・」

「だからこそ、俺達が彼を守ろう。敵にも、国にも、好きなようにはさせん」

「・・・はい！」